

氏名	遠藤節夫		
学位(専攻分野)	博士(医学)		
学位授与番号	博乙第2456号		
学位授与の日付	平成4年6月30日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当者)		
学位論文題目	子宮頸癌症例におけるハプトグロビン		
論文審査委員	教授 木村 郁郎	教授 岡田 茂	教授 赤木 忠厚

学位論文内容の要旨

ハプトグロビンはヘモグロビン結合蛋白として一般的に知られているが、急性期反応蛋白の一つとしても知られ、炎症や癌などで上昇し、免疫抑制作用があることも知られている。そこで今回、子宮頸癌患者127例について血中ハプトグロビン値と臨床進行期および予後についての関係を検討した。

ハプトグロビン値は、進行期が進むにつれて有意に高値を示した。そして対照のmean + 2SD以上を示す値を異常高値としてその出現率を検討した。I期0/37 (0.0%), II期2/48 (4.2%), III期9/31 (29.0%), IV期7/11 (63.6%)と進行期が進むほど有意 ($p < 0.0001$) に異常高値例が増加した。III・IV期で、ハプトグロビンが異常高値を示した16例中1年以内に8例 (50.0%) が死亡し、異常高値を示さなかった26例の内1例 (3.8%) のみが1年以内に死亡した。臨床進行期は癌の最大の予後因子と考えられるが、ハプトグロビンの異常高値例に短期予後不良例が多かった事実は、ハプトグロビンを治療前に測定することで子宮頸癌進行症例における予後のハイリスクグループを選別しうる可能性を示した。

論文審査の結果の要旨

本研究は子宮頸癌127症例におけるハプトグロビンについて臨床的に研究したものであるが、従来殆ど検討されていなかった臨床進行期及び予後について、進行期が進む程有意に異常高値例が増加し、又異常高値例の50%が1年以内に死亡し短期予後不良例が多いことを認め、子宮頸癌進行中の予後不良例を選別しうる可能性を示し、重要な知見をえたも

のとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位をえる資格があると認める。